スポーツの研究領域の変遷に関する研究

スポーツビジネス研究領域

5010A083-0 間仁田 康祐

研究指導教員：平田 竹男 教授

【Ⅰ. 序論】

近年、スポーツ産業の拡大だけにとどまらず、スポーツに関する研究も数多く行なわれており、多くの大学での研究、教育が盛んになり始めている。及川らは、我が国の大学における体育・スポーツ系学部と学科・コースの変遷を整理し、スポーツ系学科とスポーツマネジメント系学科の著しい増大を主因として、大学における体育・スポーツ系の教育カリキュラムが拡大・多様化していることを示した。また、過去20年間の大学における体育・スポーツ系の教育カリキュラム拡大の主因はスポーツ系学科の増大であり、近年ではスポーツマネジメント系学科が著しく増大し、その志願者数も増加傾向であるためとも述べていた。

しかし、スポーツに関する研究や教育の規模は年々拡大しているものの、スポーツに関する研究は、医学系、心理学系、経済／経営学系、社会学系など多岐に渡る学際的なものであり、本質的に全体像を捉えるのが困難である。

そこで本研究では、スポーツに関する研究の全体像を俯瞰することにより、学際的で全体像が見えにくいスポーツにおける研究領域の変遷を明らかにすることを目的とした。その際、変遷の度合いが分かりやすいように1988年、1993年、1998年、2003年、2008年の5つの時点について分析を行い、20年間の変遷を見た。

また、本研究ではスポーツ（全体）分野と、我が国で近年著しく増加しているスポーツマネジメント分野の2つの分野を対象とした。

【Ⅱ. 研究手法】

(1)スポーツ分野は”sport*”という検索クエリを設定して論文データベースを検索した。スポーツマネジメント分野はスポーツマネジメント関連ジャーナルに含まれる論文を全て抽出し、分析対象とする論文群を得た。(2)収集した論文群から、論文をノード、直接引用をリンクとする引用ネットワークを構築した。(3)最大連結成分にリンクしていない要素は削除した。(4)引用ネットワークをトポロジカルクラスタリング手法によってクラスターに分割した。(5)引用ネットワークを可視化した。(6)論文のタイトルやアブストラクトをもとにクラスターに名前をつけた。上記6つのステップを5つの分析年において行った。

【Ⅲ. 結果】

スポーツ分野とスポーツマネジメント分野のそれぞれで、49,792論文、16,843論文を取得した。スポーツ分野において最も論文数が増加したのは1993年から1998年にかけて、最も論文数の増加が小さかったのは2003年から2008年にかけてであった。また、スポーツ分野で平均出版年が最も伸びたのは1988年から1993年にかけての5.4年、平均出版年の伸びが最も小さかった

のは1993年から1998年にかけての4.0年であった。

他方、スポーツマネジメント分野において最も論文数が増加したのは1993年から1998年にかけて、最も論文数の増加が小さかったのは2003年から2008年にかけてであった。また、スポーツマネジメント分野で平均出版年が最も伸びたのは、2003年から2008年にかけての3.4年、平均出版年の伸びが最も小さかったのは1998年から2003年にかけての1.2年であった。

スポーツ分野の研究領域の可視化を行ったところ、1988年は30論文以上のクラスターが「スポーツ参加」や「若年層のスポーツ参加動機」、1993年は50論文以上のクラスターが「スポーツ心理学」や「女性参加、ジェンダー」、1998年は200論文以上のクラスターが「若年層のスポーツ参加動機」や「スポーツ傷害とケガ予防」、2003年は500論文以上のクラスターが「モチベーション管理」や「スポーツ傷害、けが予防」、2008年は1000論文以上のクラスターが「モチベーション管理」や「プロスポーツ、経済効果、スポーツ参加」というクラスターを得た。

スポーツマネジメント分野の研究領域の可視化を行ったところ、1988年は論文数が少ないため省略するが、1993年は30論文以上のクラスターが「若年層のスポーツ参加、ストレス対処」や「スポーツ参加、モチベーション」、1998年は80論文以上のクラスターが「モチベーション、心理」や「フェミニズム、けが、倫理」、2003年は100論文以上のクラスターが「ストレス対処、心理状態」や「モチベーション」、2008年は100論文以上のクラスターが「ストレス

対処、心理状態」や「モチベーション」というクラスターを得た。

【IV. 考察】

本研究の結果、スポーツ分野、スポーツマネジメント分野ともに論文数が増加し続けていることがわかった。その中でもモチベーションやスポーツ参加動機などの心理学的な研究は、両分野を通じて過去20年間に渡り主要な研究テーマであった。

また、2000年代からはプロスポーツチームの経営や経済効果などスポーツビジネス関連の研究も急速に増加し、スポンサーシップ戦略やチームのブランド力向上などの研究も拡大していることがわかった。

スポーツ医科学系の研究も継続して行われており、近年では患部別及び競技別症例を扱うクラスターに細分化されていた。

また、スポーツが健康やリハビリに与える影響に関する研究も1990年代後半から増加していた。

しかし一方で、女性のスポーツ参加やアスリートの薬物使用など社会学やジェンダーに関するテーマは1990年代前半には盛んに行われていたが、2000年代にはあまり研究されなくなった、あるいは他の研究領域の方が多く研究されるようになったと考えられ、近年ではモチベーションや経済効果などが主要な研究トピックであるという知見を得た。

【V. 結論】

本研究は、多岐に渡るスポーツに関する研究の歴史的な進化を把握することに役立つ。本研究の手法を用いて、最先端のスポーツ研究のトレンドを整理していくことが、我が国におけるスポーツ研究の成長の一助となれば幸いである。